

# 資料館 だより

Miyako  
Kitakamisanchi  
Museum of Folklore

No.30

## 宮古市北上山地民俗資料館

〒028-2302 岩手県宮古市川井 2-187-1  
TEL. 0193-76-2167 FAX. 0193-76-2933  
<http://kitakamisanchi.city.miyako.iwate.jp>  
令和6(2024)年3月31日発行

### ◆企画展「失われゆく道具や技術」開催

サブタイトルを「活動のあゆみと調査記録の報告」として、第26回企画展を令和5年10月1日から12月24日までの会期で開催しました。来年度、当館は開館30周年の節目を迎えますが、これに先立ち今年度が、「北上山地川井村の山村生産用具コレクション」1,345点が国の重要有形民俗文化財に指定されてから20周年、そして当館の活動にご協力いただいているボランティア団体「小国分館友の会」が結成されて10年となることを記念して開催したものです。展示にあたり、当館名誉館長である名久井芳枝先生から「モニュメント未来樹に託した願い」というタイトルで寄稿していただき、開館準備から現在を振り返り、そしてこれからの館があゆむ方向性を示していただきました。

展示は2部構成で、第1部で館の活動や「小国分館友の会」の活動のあゆみを紹介し、第2部では開館20周年以降に行った調査記録の内容を紹介しました。第2部で紹介した内容は、①「蚊ゆぶしキノコ」について、②サンナメ樹皮の加工について、③「はばきはたし」や「おさ」の実測図作製について、の3つです。

これらの調査記録は地域住民の皆さんや「小国分館友の会」メンバーの皆さんが協力してくださったものです。「小国分館友の会」の皆さんは、小国分館を会場に行われる「神楽共演会」や「水車の畑まつり」などのイベント運営の協力の他にも、敷地の草刈り作業などの環境整備や、有形民俗資料の調査記録にもご協力をいただいております。展示で紹介したのは、現在ではほとんど使う機会のない「蚊ゆぶしキノコ」の使用例や、樹皮を筒状にした容器の製作方法についてで、この再現記録は、昔のことをご存知の方でなければできない内容です。

あわせて、小国分館の資料調査等でご指導いただい

ている民俗考古学者の名久井文明先生からは「北上山地の民俗事例が意味するもの」と題し寄稿文をいただきました。内容は、今回の展示で紹介した3つの事例について、その意義を解説していただいたものになります。

小規模館である当館では、博物館の役割の一つである「調査研究」にまではなかなか時間を割けない現実がありますが、研究者のアドバイスを心得て記録した内容を企画展で紹介することができ、またその意義を解説していただいたことで、今では見るものがなくなった道具が何に使われたのか、どうやって作られたのかを伝えることができたと考えています。



①「蚊ゆぶしキノコ」の使用について記録



②「サンナメの樹皮」加工について記録

### ◆ボランティア研修会開催(7月13日)

巻頭でも紹介しましたが、当館にはイベントや体験学習などにご協力をいただいているボランティア団体「小国分館友の会」があります。その研修会として、今年は一戸町の御所野縄文博物館、鳥越もみじ交遊舎の活動を学びました。「御所野遺跡を支える会」のボランティア会員から遺跡について案内、解説をしていただき、また職員の方からはボランティア会との交流の場を設けていただき、活動について貴重なお話を伺うことができました。もうひとつの見学場所である鳥越もみじ交遊舎では、地域に古くから受け継がれてきた竹細工の実演を見学することができて、参加者は大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。



御所野縄文博物館にて

### ◆「正月飾り作り」開催(12月13日、16日)

毎年、お正月には年神様を迎えるために、松や幣束などを飾った[年縄]を作り、神棚や炊事場などに納めます。地域に伝わる年中行事とそれに関連する技術を伝承しようと、[年縄]の作り方について学ぶ講座を開催しました。北上山地民俗資料館小国分館友の会のみなさんが講師です。実際にわら縄のない方や、「年縄」にマツ葉や煮干しを取り付ける順番や、年縄を飾る場所などを教わりました。参加者にとって縄のない初めてで難しそうでしたが、何度も挑戦し、丁寧になっていました。次に、[年縄]よりも太いわら縄もない、玄関飾りにするために、華やかな水引きや折り紙の扇などを工夫しながら飾りつけ、素敵な正月飾りを完成させました。



「年縄」を作る様子

### ◆第4回「小国分館水車の畑まつり」開催

10月15日、あいにくの雨天となりましたが、会場を屋内に変更するなどして無事に開催することができました。このイベントは小国分館で収蔵している宮古市内で収集された有形民俗資料を見ていただく機会を設けるとともに、平成26年度に小国地区の高屋家から寄贈を受けて移設した水車小屋の活用を目的に開催しています。

当館小国分館は旧小国中学校を活用した調査事務所で、イベントでは広い館内や、屋外に植えたの民具に関連した樹木などを見学する際に、クイズ形式の問題を解きながら楽しんでめぐるできるよう工夫しました。また、小国振興舎の皆さんを講師にお願いした「そば打ち体験教室」や、館職員による「昔の技術で小物作り」の各種もの作り体験を希望者に喜んで参加していただくことができました。このほか、鈴久名こだま会の神楽栄子さんには郷土食の「小豆きび団子」や「舞茸おこわ」を作っ



水車の畑まつり・「そば打ち体験教室」の様子



水車の畑まつり・「昔の技術で小物作り」の様子

## ◆ミニ企画展の取り組み

ミニ企画展は当館1階ロビーを会場に、川井生涯学習センター、市立図書館川井分室との3館が共催して、地域の歴史や自然などをテーマに年4回展示するもので、今年度で3年目となり、館の事業として、定着しました。

各回で施設ごとに主担当を決め、展示内容に特色を出しています。次に展示の概要を紹介します。



「早池峰山麓のいきもの」展示の様子



「夏休みワクワク昆虫展」展示解説会の様子



「地域のあかり〜閉伊川の水力発電〜」展示の様子



「山峡に生きた歌人 西塔幸子〜草花の歌〜」展示の様子

| タイトル（会期）                                                    | 内容（来場者数）                                                                                                                                                                                    |
|-------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 第1回<br>「早池峰山麓のいきもの」<br>・川井生涯学習センター主担当<br>・6/1～30（会期延長～7/17） | 川井地域にゆかりの自然愛好家や自然保護指導員など13名から写真を提供していただき、哺乳類や鳥類など7分類、写真175点を展示。天然記念物のイヌワシ、ヤマネ、ニホンカモシカなどの貴重な生き物や普段はなかなか見られない動物たちの姿を紹介することができました。<br>（来場者371人）                                                |
| 第2回<br>「夏休みワクワク昆虫展」<br>・当館主担当<br>・8/1～20、関連事業 7/30          | 元川井西小学校の校長先生で岩手虫の会の会員でもある三浦秀明さんが国内外で採集した昆虫標本をお借りして展示。あわせて岩手虫の会会員が執筆担当している岩手日報ジュニアウィークリー「いわての虫シーズン⑤」の記事や、オオクワガタの生体も展示。関連事業として展示解説会も開催。<br>（来場者327人、参加者 24 人）                                 |
| 第3回<br>「地域のあかり〜閉伊川の水力発電」<br>・当館主担当<br>・11/15～12/24）         | 閉伊川にある鈴久名、川内、腹帯の3か所の水力発電所について沿革などを紹介し、あわせて電気が通る前と後の暮らしの道具を展示。かつて市内にあった発電所の遺構についても写真や地図で紹介。<br>（来場者230人）                                                                                     |
| 第4回<br>「山峡に生きた歌人 西塔幸子〜草花の歌〜」<br>・市立図書館川井分室主担当<br>・3/1～31    | 歌人・西塔幸子（1900～1936）は生涯に千首を超える歌を残し、遺稿歌集『山峡』には金田一京助が序文を寄せてその作品を評価しています。教師でもあった幸子の最後の勤務地・旧江繋小学校跡地には歌碑と記念館が建てられています。今回の展示では主に草花について詠まれた歌を紹介し、あわせて幸子の生涯や幸子を顕彰して建立された各地の歌碑や記念館について紹介。<br>（来場者148名） |

## ◆伝統的食文化伝承活動講座

地域に伝わる、昔ながらの大豆と塩だけで作る「味噌づくり」講座を開催しました。講師は映画「タイマグラばあちゃん」の向田マサヨさんの味噌づくりを伝承している山代陽子さんと、全3回にわたり教わりました。

### 第1回「煮上げた大豆を潰し、味噌玉を作る」(3/1)

タイマグラのフィールド・ノートを会場に開催しました。

前日から水に浸していた大豆を、親指と薬指ではさんで潰せるほどのやわらかさに煮上げます。それを桶の中で潰します。昔は「味噌踏みつまご」を履いたそうです。

まんべんなく潰したら、空気を抜きながら山のような形の四角形に形を整えます。これが味噌玉で、古くは、「南部の玉味噌」と呼ばれました。

### 第2回「ワラ縄で味噌玉を吊るし、乾燥させる」(3/2)

前日作った味噌玉を吊るすワラ縄を編む作業をしました。縄ないが初めての方がほとんどでしたが、練習をしながらワラをなう技術も習得しました。



縄ったワラで「味噌玉」を吊るす

味噌玉は乾燥していくにつれ、表面がひび割れて空気中にある自然のコウジ菌など微生物がつくのだそうです。それぞれ家に持ち帰り、1か月乾燥させました。

### 第3回「仕込み」(4/12)

この1か月間、味噌玉の側を通る度、変化があるかどうか気になり観察しました。2週間位経つと底のひび割れ部分の奥に白くふわふわしたコウジ菌が見られました。皆さんがそれぞれ自宅で乾燥させた味噌玉を割り、細かく砕いて大豆を煮たときの煮汁や塩水を混ぜ合わせて、容器に仕込みました。

これから約2年間熟成させます。参加者からは「初めての体験だったが、とても興味深かった。手間と時間をかけて丁寧に教えていただいた。風味豊かな味噌が食べられることを楽しみに待ちたい」等の感想がありました。2年後、完成した味噌で郷土料理の講座の開催を予定しています。



容器に仕込んだ味噌

## ◆第4回小国分館神楽共演会 7月2日

小国分館を会場に、江繋早池峰神楽保存会と末角神楽保存会の皆さんにご協力をいただき、ゲストに遠野市宮守の塚沢早池峰神楽保存会の皆さんをお招きして開催しました。また、会の運営には当館ボランティア会の小国分館友の会の皆さんにご協力をいただきました。

末角神楽の「打ち鳴らし」にはじまり、「三番叟」、江繋早池峰神楽の「寅走り」、「三番叟」、休憩をはさんでゲストの塚沢早池峰神楽の「鐘巻の舞」、末角神楽の「水神」、江繋早池峰神楽の「一草」、末角神楽の「清剣舞」、「権現舞」で締めくくられました。このイベントはかつて行われていた夜神楽をイメージして、複数の演目をじっくり楽しんでいただこうと開催しています。末角神楽と江繋早池峰神楽のそれぞれの「三番叟」を見比べたり、塚沢早池峰神楽からは普段は演ずる機会の少ない演目を披露していただいたり、3時間あまりの長丁場でしたが、飽きずに楽しむことができました。

小国分館は宮古市内で収集された有形民俗資料を収蔵する調査事務所です。年に数回、このようなイベントを開催して、普段は見ることができない所蔵資料を公開しています。



江繋早池峰神楽保存会



末角神楽保存

## ◆郷土食講座(5月24日、12月7日)

5月の「麦ぞうすいとひゅうず作り」では、宮古地方食の匠の会会長の神楽栄子さんに作り方を教わりました。色々な野菜が入り、栄養たっぷりで満足感のある「麦ぞうすい」と小麦粉の生地の中に味噌、クルミ、砂糖、白ゴマが入った「ひゅうず」は、優しいほっとする味で心も体も元気になり楽しく学ぶことができました。

12月の「蕎麦切り体験教室」は、門馬地区の区界高原そば生産振興組合の皆さん



「蕎麦切り体験教室」の様子

に教わり、地元産の蕎麦粉100%で作る「蕎麦切り」に挑戦しました。蕎麦粉を「しめす(水分を粉にいきわたらせる)」、「こねる」、「のす(のぼす)」、「切る」の工程を体験しました。参加者からは、「見るとやるとは大違い。さすが先生たち素晴らしいです。とても楽しかったです。」と感想がありました。この講座を通して地元の食材で、その土地ならではの調理方法でいただくという郷土食の魅力を感じていただけたのではないかと思います。

## ◆「夏の工作、冬の工作教室」(8月4日、1月5日)

当館では毎年、夏休みと冬休みの期間にあわせて、工作教室を開催しています。夏の工作教室では、「閉伊川紙」というかつての和紙文化を後世に伝えようと和紙作りに取り組んでいる「紙漉き屋 群青」の栗橋くみ子さんを講師に、うちわ作りの体験をしました。参加者は和紙に色をつける折り染めに挑戦したり、和紙についての歴史を教してもらったりして、楽しく学ぶ事ができました。

また、冬の工作教室では、クルミの樹皮を使って小物



和紙のうちわ作りの講師先生と参加者の皆さん

入れ作り体験を開催しました。オニグルミの木の皮を細長く裂いたものを「平組み」で組んで、小さいながらも温かみのある可愛いカゴを完成させました。

## ◆布ぞうり作り方教室(7月23日、11月19日)

この教室は、体験学習ボランティア養成講座の一つとして地元の方々に講師に平成27年から毎年開催しており、今は当館職員が作り方を覚えて講師を務めています。作り方は、まず2本の縄を左下がりに縛って横緒を作ります。次に、土台となる本体をつま先から組み、横緒を取り付けて、再びかかとまで組みます。最後に、鼻緒を付けて、裏側に出ている布の始末をして完成です。昔は足の指に芯縄をかけて作りましたが、今は体に負担が少ないようにすに座って作業する工夫もしています。

参加者からは「楽しかったけど難しかった。でも作ることができて嬉しかった。ふっくらとした履き心地にできたと思う。」「両方同じに作るのが難しかったけど、形になって良かった。」との感想が寄せられました。土台を組み始めるところや布を引っ張る力の入れ具合など難しいところがありましたが、参加者の皆さんは素敵な布ぞうりを仕上げる事が出来ました。



「布ぞうり作り方教室」の様子

## ◆「昔のものの作り体験」(6月7日)

当館で所蔵している樹皮製の[つかり]や[こだし]に用いられている「平組み」、「網代組み」の技法でかご作りをする講座を開催しました。

参加者は実際にクルミの枝から皮を剥ぐところから始め、前日に切った枝にカッターで切り込みを入れると簡単に綺麗に皮を剥ぐことができ、皆さん驚いていました。

そしてかご作りは、テープ状に切った樹皮を使い、底の部分から組み始めます。それぞれ好きな技法で作って、綺麗な模様の素敵なかごを完成させました。



「昔のものの作り」・底の部分を組む様子

## 「宮古市文化財保存活用地域計画」の策定

2018年(平成30年)の文化財保護法の改正により、文化財保護法第183条の3第1項において市町村における文化財の保存・活用に関するマスタープランとアクションプランを兼ねる「文化財保存活用地域計画」が制度化されました。文化財を保存しながら活用するという新たな視点です。これは、少子高齢化・過疎化など人口減少社会における文化財の滅失や散逸、後継者などの担い手不足などがその背景にあります。

この法改正を受けて当市教育委員会は、2021年度(令和3年度)からの3ヶ年計画で「宮古市文化財保存活用地域計画」(以下、地域計画)の策定に取り組み、2024年(令和6年)には文化庁への認定申請を行う段取りとなっています。

地域計画では、当市の歴史文化の特性を「北上山地と三陸海岸に育まれた森・川・海の歴史文化」と捉え、これら文化財の保存・活用の目標として「森・川・海の時空をつなぐ「ふるさと宮古」の創造」を掲げています。そして、指定文化財のみならず、関連する多種多様な文化財も含めた事業展開を実施するために、ストーリーに基づいた5つの「関連文化財群」としてまとめています。また、各地域の特徴ある「地域の宝」を網羅的に保存・活用していくために、9つの「文化財保存活用区域」を設定しています。文化財を個別のもの、即ち点ではなく一体としてみる、連携させて活用していくということになり、観光や地域おこしにも繋がっていくものとなります。

この地域計画においては、当然当館としても大きく関わるとともに実施主体の一部として果たすべき重要な役割があると考えております。一つ目は、当館の主体である民俗資料(民具)の収集、調査、研究の成果を反映させることと。二つ目は、川井地域にある施設として当地域内における事業実施へのリーダーシップをとっていかねばならないということです。

一つ目は、5つ設定された関連文化財群のうち、当館職員も関わった、第5話の「早池峰山麓の暮らしと祈り」です。

詳細は地域計画を参照いただきたいが、現状と課題の分析に基づく5つの方針を掲げたところです。どれも一朝一夕に実現できるものではないと思いますが、当館が現在展開している各種事業の延長線上にあるものばかりといえます。

二つ目は、9つに設定された文化財保存活用区域のうち、川井地域では3つの区域(川井地域、小国地域、門馬地域)が設定されています。未指定の文化財もさることながら、特産品や食文化、風習・慣習、産業、伝説や昔話、自然の景観など様々な地域資源を含めた「地域の宝」を探し、巡ることができる「地域の宝～文化財保存活用区域マップ」を作成していくことになります。当然のことながら、地域住民や関連施設等との連携が重要となります。ただ懸念しているのは、区域内に点として所在する地域の宝や文化財をつなぐ公共交通機関の不足です。広大なエリアを誇る川井地域においては深刻な課題といえるのではないのでしょうか。

地域計画は、当市のまちづくりの指針となる最上位計画の「宮古市総合計画」と整合を図りながら取り組み期間や重点項目を設定しています。

しかしながら一方で現状を見据えたときにいくつかの課題も見えてきます。事業推進のための予算、専門的知見を要する人材(学芸員等)の育成と配置、そして何よりも地域住民の関心と理解・協力が必要不可欠となります。過疎化に伴う人口減少が進む地方自治体としては、地域計画を推進するための予算には限界があります。地域計画策定後の事業実施に伴う新たな補助事業メニューの創設が望まれるところです。

東日本大震災や新型コロナウイルス感染拡大の影響により、当市の文化財を取り巻く環境は大きく変貌し、当市の歴史や文化の継承は困難な局面を迎えていると思っています。このような危機感を持ちながら、日々懸命に取り組んでいかなければならないという強い覚悟をもって取り組んでいきたいと思っております。

## ◆「鞭牛和尚の足跡をたどる③」5月27日

鞭牛和尚の道路改修の業績を学ぶ見学会の3回目を開催しました。1、2回目の閉伊川流域に続き、今回は長沢地区にある「霊場十三仏」、「布引白糸の滝」など8か所の史跡などをめぐりました。歴史的な内容は市史編さん室の假屋室長から、地質の観点からは市文化財保護審議委員の柳澤忠昭さんから学び、「難所」がなぜ難所だったのか理解を深めることができました。



「鞭牛和尚の「岩屋」見学



「大樹の森」の倒れたシナノキの古木

## ◆「森の体験学習会」

かわい木の博物館案内人を講師に、当館が展示している有形民俗資料に使われている樹木や、昔の暮らしと森林とのかかわりを学ぶ学習会として春、秋、冬に開催しています。春は6月1日にタイマグラ周辺とかわい木の博物館9「大樹の森」の散策を行いました。同じ場所の季節の変化を感じ取ろうと、秋は同じコースで10月6日に開催しましたが、あいにくの強風のため標高が高い「大樹の森」の

## ◆空調改修工事がはじまります

まもなく開館30周年を迎える当館は、施設の老朽化が進み、設備の故障も増えてきました。今年度は空調設備改修工事の実施設計を行い、来年度から数年かけて空調設備を更新していきます。工事に伴う休館などの情報は、市広報や当館のホームページ、公式フェイスブックページでお知らせします。体験学習やイベント実施の様子も紹介していますので、是非ご覧ください。

北上山地民俗資料館ホームページアドレス

<http://kitakamisanchi.city.miyako.iwate.jp>



【QRコード】

(左)北上山地民俗資料館公式ホームページ

(右)北上山地民俗資料館公式フェイスブック



見学は断念しました。1月28日は川井生涯学習センターと共催で、「輪かんじき」をはいて区界高原の「不拔の森」周辺を散策し、冬の自然観察を行いました。

## ◆「親子で砂金探し体験」8月5日

今年度初めて開催した事業です。かつての閉伊川やその支流の上流域には金山があり、川で砂金を採ったという伝説や伝承が残されています。また当館には昔の砂金採りに使われた道具が展示されています。講師は住田町教育委員会の佐々木喜之さんで、参加した親子3組が、砂金を選別するパンニング皿の使い方や砂金のありそうな場所を教えてもらい、実際に川で砂金を探しました。

この講座の開催にあたり、下調べを行いましたがかつて砂金を採ったという伝承が残っている場所でもその後の水害で地形が変わったり、護岸工事で川に近づくのが危険な状況になったりして、現在砂金を探すのは簡単なことではないと分かりまし

た。また、この事業は市中央公民館、川井生涯学習センターと共催で行い、閉伊川漁協組合ほか関係機関の許可を得て実施しました。



「親子で砂金探し」の様子

## ◆ご協力ありがとうございました!! (50音順)

【資料寄贈】令和5年4月1日～令和6年3月31日まで

飯岡豊様、江繋郷土芸能保存会様(寄託)、嶋津茂子様、嶋津義次様、立花義光様、中仁沢隆様、中村博文様、本田理子様、女ヶ澤かち子様、八木武子様、柳澤忠昭様、山桑やよ子様、山本建夫様

## ◆令和5年度の入館者数(人)

| 一般    | 学生 | 小中高 | 団体  | 合計    |
|-------|----|-----|-----|-------|
| 1,271 | 9  | 259 | 353 | 1,892 |

小学校の社会科見学では、市内高浜小、新里小、津軽石小、山口小の皆さんに見学していただき、解説や体験の対応をいたしました。

## ◆来館者の感想(メッセージノートより)

「厳しい暮らし、全てが手作業で高度な技術で道具を作ったこと、当時の生活のエッセンスが詰まっているようでした。」

(盛岡からの見学者の方)

「(一部抜粋)SDG's が何百年前から当たり前の川井人！若い方がざらりとバッグを織ったり作ったりできるとさらにびっくりなのですが、いかがですか？」

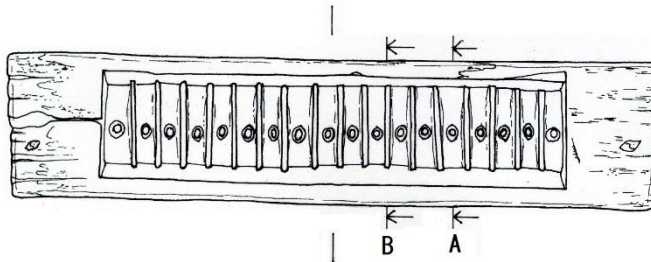
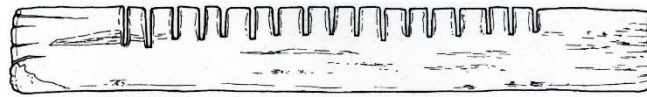
(長崎県からの見学者の方)

伝票番号 1964

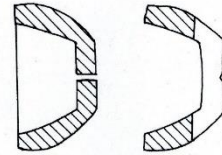
資料名 はばきはたしのおさ

寄贈者 岩館吉三

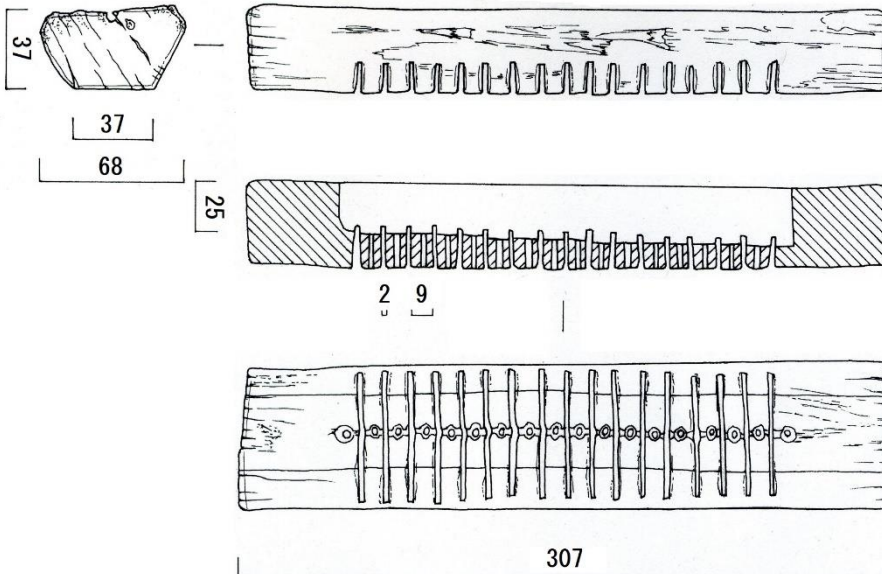
作者 櫻岡咲子



B部断面図



A部断面図



【はばきはたし】

(【はばき】を織る途中、中央の横木が【おさ】。【おさ】の下は【ひ】で、さねを引っかけて通す様子)

# ◆【はばきはたしのおさ】について

「はばき」とは山仕事や畑仕事で足のすねを保護する目的で着用したもので、当館ではガマの葉や茎、ミョウガの葉や茎やマフジの蔓で作られたものなどを所蔵しています。このうちマフジの蔓で作られたものは「さねはばき」と呼ばれています。マフジ蔓の芯を「フジさね」といい、木槌で打ってやわらかくして細くした「さね」を一定の長さで切りそろえ、それを横材として織って作られた「はばき」ということになります。また「はたし」とは機織り機のことをいうので、「はばきはたし」とは「はばき」を織る道具ということになります。

「おさ」は「はばき」を織るために必要な道具です。「はばきはたし」に縦芯となるマダ撚りひもを掛けながら、「おさ」に交互にあげられた穴と溝に通していきます。図では穴が一八、溝が一七ありますから、縦芯は三五本となります。縦芯が通った状態で「おさ」を傾けると、穴に通った縦芯は動かないまま、溝に通った縦芯が端まで広がります。そのため一本置きにすぎ間ができるので、そこに横材を通します。そして「おさ」を力強く下に打ち込みます。また次に「おさ」を逆側に傾けると先ほどとは違う方向にすぎ間ができるので、横材を通して打ち込みます。これを繰り返して、「はばき」を織ります。「おさ」ひとつで、縦材をそろえる、縦材を交互に開く、その重みを利用して横材をしつかり打ち込むという、とても重要な役割を果たしていることが分かります。

今回の企画展では、所蔵する「はばきはたし」と「はばきはたしのおさ」の実測図を紹介しました。「おさ」の形状は大きく2つあり、一つは「むしろはたしのおさ」と同じ作りで、もう一つが今回の資料紹介で紹介したもので、「箱型箴綜統」と命名されています。この「箱型箴綜統」については、名久井文明先生から寄稿していただいた「北上山地の民俗事例が意味するもの」の3ページから詳しく書かれています。

当館では幸い、小国地区の高屋喜多男さん(故人)の協力により、「はばき」も「むしろ」もそれぞれの「はたし」で織る様子を記録することができました。第一展示室ではその製作過程が分かる状態のものを展示しています。